

しかし実は、こういった思想は、早く新鶴村にもあった。『村誌』からそのまま抜粋してみよう。

「佐賀瀬川は特に小学校に遠隔であつたためか、荒井秀吉氏の如き特に教育に熱心な指導者があつたためか、明治十八年文学館と称する夜学校を興隆寺内に設けたり、明治三十八年小学校に実業公民学校設置の前年、既に農業補習学校を設けている。この機運は当時教育の先覚者のあつた他の部落にもあつたものか、殆ど同時に下小沢にも農業補習学校、後に私立小沢農業補習学校と改称したものが設立されている。…図書館その他・佐賀瀬川の荒井秀吉氏は教育が将来の農村指導の基礎をなすことを思い、既に部落に文学館、補習学校などを特設すると共に、明治四十一年(一九〇八)五月十八日私立荒井図書館を創設して村民に開放した。この蔵書は、七〇〇部二、八〇〇余冊に達する。やがてこれを一部落民の利にのみ供すべきでないのを覚り、大正五年十一月この全部を挙げて新鶴村に寄付、翌々大正七年(一九一八)新鶴図書館と改称、新鶴第二小学校の一室を充てて広く村民への図書閲覧に供した」

この「荒井図書館」の蔵書は、今現在、新鶴村民俗資料館に保存されている。この、「農村に文化を」といった先人のいたことを、私たちは忘れてはならない。また、明治維新、戦後改革に相当する第三の大変革期と位置づけられている現在、心の豊かさを求められる時代こそ、大地に根ざした農業の価値が復活する時でもある。

— ゆっくりと歩くような速さで — 私たちは新鶴農業の歴史を振り返り、田園の有する意味を確認する必要があるのではないだろうか。



新鶴村民俗資料館に保存されている「荒井図書館」の蔵書。
『世界文明史』や『通俗三国志』『校刻日本外史』『古事類苑』などがあつた